

## 肖像画家 ジョージ・ロムニー

松島 正一

十八世紀後半のイギリス絵画界はレノルズ、ゲインズバラらの登場によって、わずか半世紀の間にヨーロッパでも肖像画の多産な国となった。二人の後を継いだロムニーも肖像画家として知られ、レノルズやゲインズバラとよく比較されるが、彼ら二人に比べるとあまり高く評価されていない。彼はエマの肖像画、シエイクスピア・ギャラリーの『リア王』をはじめとするいくつかの作品で知られているにすぎないのは残念である。

### (1)

ジョージ・ロムニーは一七三四年十二月二十六日、カンバーランドに生まれた。父親は指物師 (Joiner)、家具師であった。彼は器用な人で、色々な仕事に手を出した。たとえば輸入されたばかりののマホガニー材を使って筆筒を作ったりした。

ロムニーは父親の器用さを受け継いだ。ヴァイオリンを作ってそれを弾いて遊んだ。町の学校に行ったが、勉強は得意ではなく、絵を描いたりするのが好きだった。父親は息子が十一歳になる前に学校を辞めさせ、家

業を手伝わせた。

仕事以外は絵を描いたり、住込の職人の一人がいつも出るとすぐに貸してくれた月刊誌の挿絵を注意深く模写したりして過ごした。村の人に肖像画を描いてくれと頼まれ、それをうまくこなしたので、父親は息子が画家になりたがっていると思った。

十八歳の時、当時近くにいた巡歴画家ステイールの徒弟になり、ここで画家としての技術を学んだ。ステイールは凡庸な画家であったが、パリで修業してきただけあって、若い弟子の教育には優れていて、後年彼に役立つことを沢山教えてくれた。

ステイールが弟子の若い婦人と駆け落ちをしたので、ロムニーは二人のために手筈を整え二人を助けなければならなかった。いろいろな災難に巻き込まれたり、また野宿をしたりして、二人はやつとの思いで、駆け落ちの地スコットランドのグレットナ・グリーンに辿り着き、結婚することができた。

この旅の途中、夜露に濡れたりして、あまり体の強くないロムニーは熱病にかかってしまった。ところが、病気になるたロムニーをメアリー・アボットという女中が看病してくれたので、彼はメアリーにすっかり惚れてしまい、病気が回復すると彼女と結婚することになった。時は一七五六年十月十四日、ロムニーは二十二歳、まだ生活の糧は何もなかった。

ヨークに行っていたステイールが来ないかというので、ロムニーは妻を置いてヨークに出かけた。しばらく親方の放浪生活に付き合ったが、その日暮らしの生活、経済的な困窮に嫌気がさして、もし年季奉公契約書を破棄してくれるなら、貸した十ポンドは棒引きにしてもいいということになった。

親方と弟子の二人は同意した。親方と別れたロムニーは妻のいるケンダルに戻った。ここで肖像画家として

の仕事をはじめた。徐々に評判が上がり地方の名士から肖像画を依頼されるようになった。彼はまた歴史画や風景画も手がけ、当時よく行なわれていた抽選方式でそれらをケンダルの公会堂で売った。

そうこうするうちに若い夫婦にも百ポンドもの資産ができた。ロムニーは妻と二人の子どものために七十ポンドを残し、自分は三十ポンドを持って、より大きな可能性を求めて一七六二年三月十四日、単身ロンドンに打って出るようになった。翌年幼い娘が亡くなったので、夫人は息子を連れて義父ジョン・ロムニーの家に行き、そこで暮らすことになった。

ロムニーのロンドン滞在は一七九九年まで続くが、妻とは親密な愛情で結ばれ、彼女の要求するだけのお金はきちんと送っていたようである。しかし彼女をロンドンに呼び寄せることは一度もなく、ケンダルを訪れたのは三十七年間でわずか二回であったと言われている。これが悪意ある批評家などから、ロムニーは自分に妻のいることを忘れてしまったとか、あのロムニーの「見捨てられた妻」とか、色々と言われるもとなつた。

このことに関して、ロムニー夫人は夫に苦言の手紙を書いていないし、自分をロンドンに呼んでくれと夫に要求もしなかった。晩年、夫が病人になってやつと故郷に戻って来たときも、優しく迎え、献身的に死ぬまで看病している。ロムニーは妻にきちんと送金したので、夫が不在であったとしても、金銭上の不便もなかったようである。息子が大きくなってロンドンにやって来たときは、ロムニーは息子を暖かく迎え入れ、息子を町に連れ出している。

ロムニー夫人は貧しい家の出であつたし、たいした教育も受けていないし、大した趣味のない平凡な女性であつた。彼女は自分の住んでいる生活の範囲内で人と付き合うことで満足し、社交界で人と混ざって、批評や嘲笑を受けたりしたいと思う女性ではなかつた。ロンドンに出て来たなら、きっと不幸であつただろうし、夫が

送っている生活を楽しむこともできなかつたであろうし、夫の成功の邪魔にもなつたであろう。また、ロムニーも素朴な妻を口さがらない社交界のさらし者にはしたくはなかつたのである。

## (2)

ロムニーは照会状や紹介状を持つてロンドンに出て来たわけでもなく、金を沢山持っていたわけでもなかつたから、最初の十年間は、自分の生活と故郷への送金で苦勞した。知り合いはロンドンには二人しかいなかったようだし、その二人も彼を助けられるような地位にいる人ではなかつた。

一七六三年芸術協会に出品した『ウルフ將軍の死』が委員会で二等賞に選ばれ、五十ギニーの賞金を受け取るはずであつたが、ジョシュア・レノルズ (Joshua Reynolds, 1723-92) が反対したといわれている。反対意見は次のようであつた。作品はこの未知の画家によつて描かれたものでなく誰か違ふ人によつて描かれたものはないか。この作品はまやかし物で、描かれている衣装も当時の物でない。ウルフ將軍 (James Wolfe, 1727-62) はケベック攻略でフランス軍を粉砕したが、自らは敵弾を受け、勝利の報告を聞きながら絶命したが、この事件はつい最近の一七五九年のことで、厳密には歴史画の題材ではないとまで主張された。

受賞はならなかつたけれど、ロムニーには協会の委員会の好意で賞金の半額二十五ギニーが渡された。当時の画家たちは、新參の画家ロムニーにこのような侮辱を与えたのであつた。これが原因となつて彼がレノルズに反感を持ち続けたといわれているが、レノルズとロムニーの仲たがいは二人の画風の違ひによると考えたほうがよいのかもしれない。

一七七一年、ベンジャミン・ウェスト (Benjamin West, 1738-1800) が同じ題材で描いた作品『ウルフ將軍の死』をロイヤル・アカデミーに出展し評判となる。この絵は当代の衣装をまとった人物を描くことで新古典主義の約束事を壊し、この作品の成功は趣味の変革も引き起こしたと言われる。この時にもレノルズは反対したが、最終的には作品の価値を認めることとなった。ウェストはウルフ將軍の死の場面を歴史画の次元へと高め、のちにジェイムズ・バリ (James Barry, 1741-1806) も同じ場面を描いて、一七七六年ロイヤル・アカデミーに出展することになる。

ロムニーは自分の内部にあると感じているものを成就するためにはグラランド・ツアーに出かけて巨匠の作品を勉強してくる必要を感じていた。また肖像画家が顧客たちのサークルに対等に迎え入れられるためには、パトロンに匹敵する教養と趣味、社交の才を身につけていなければならなかった。彼はグラランド・ツアーの最終地イタリヤに行こうと思って努力したが、資金不足で自分の希望をかなえるのはなかなか難しかった。できるだけ節約して資金を作った彼は一七六四年九月、パリに行くことができた。パリでは自分の気に入った作品を模写し、ギャラリーや教会を訪れ、そこにある宝物で目の保養をしたりして、たった七週間であったが有意義に過ごした。

ロンドンに戻ると雄々しく仕事に取りかかり、一七六五年には「エドワード王の死」を出品し競争者をなぎ倒して芸術協会から五十ギニーの賞金を勝ち取った。

一七六七年には故郷の妻に会いに行っている。ロンドンに戻る時には弟のピーターを連れて来て、彼を仕事の助手にしようとしたが、この弟は勤勉ではなく、兄の期待を裏切って、兄のもとを離れ放浪生活を送った後、マンチェスターに落ち着いたが生活は不安定であった。

一七六八年、ロムニーは詩人・劇作家リチャード・カンバーランド (Richard Cumberland, 1732-1811) と親しくなった。カンバーランドはロムニーより四歳年上であったが、すでに『兄弟』(一七六九)、『西インド諸島の人』(一七七二)のような感傷的な喜劇を書いていて文学界では知られていた人であった。また、彼の母方の祖父はポープの『ダンシアッド』第四巻二〇一行以下で槍玉に挙げられていることでも有名な古典学者リチャード・ベントレー (Richard Bentley, 1662-1742) であった。カンバーランドと知り合いになったため、ロムニーの交際範囲は大きく広がり、有名人から多くの肖像画の依頼が舞い込んで来るようになった。

ロムニーがこの頃友人になった人に細密画家オジラス・ハンフリー (Ozias Humphrey, 1742-1810) がいる。ロムニーはハンフリーと度々遠出をし、多年に渡っての親友の一人となった。ちなみにハンフリーは、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の通ったパース画塾で教育を受けブレイクの友人でもあった。

(3)

ロムニーにとってイタリア訪問は長年の夢であった。機会は二度ほどあったが、一度は友人の死去のために、もう一度は自分が重病に陥りイギリスを発つことができなかった。

一七七三年、三十八歳のロムニーは長年の夢がかなって友人ハンフリーとイタリアに出かけることになった。三月二十日ロンドンを出発、途中ドーセット卿の客人としてノールに寄り、海路フランスに渡りローマには六月十八日に到着している。

この時代、パリからイタリアに行くには二つの道があった。一つはリヨンからスイスに抜け、アルプスを越

えてトリノに出る道、もう一つの道はリヨン、マルセーユと南下してコート・ダジュールのどこかの港から船でジェノヴァに渡るものである。ロムニーはニースからフェラツカ船でジェノヴァに渡る後者のルートを選んだ。

ロムニーはグロスター公から法王クレメント十四世への紹介状を貰っていったので、法王は彼を歓迎し、ラファエルの作品の模写ができるようにヴァチカンの中に足場を建ててゐたことを許してくれた。

ロムニーは資産家ではなかったので、ローマ滞在中は肖像画や歴史画を描いたり、またローマにある巨匠の傑作を模写したりして自活しなければならなかった。自分の作品はローマではすぐに売れないし、ローマ以外の都市を訪れたいと思っていたので、生活をできるだけ切りつめ、ヴェネチア、ボローニャ、フィレンチエ、パデュアなどだけでなく、またモデナ、レッジョ、マンチュアなどの小都市も見物した。

帰路はヴェネチアに数か月滞在した後、パルマに行き、そこに二三週間滞在し、コレジイオを研究したのは大きな成果であった。パルマからエクスIIアンIIプロヴァンス、そしてパリを経由してゆっくりとロンドンへ戻った。二年ぶり故国に戻ったロムニーは意気盛んで、アイディに満ちあふれ、自分が見て来た全てに対する情熱で圧倒されていた。しかし金銭的には生涯においても恵まない状態におかれた。実際、フランスを通過して帰って来たので、すでに金を借りていたし、わずかな資金が尽きて旅行中にほとんど餓死せんばかりであった。彼はイタリアに出かける前に銀行に預けておいた金をすべて引き出す有様であった。

## (4)

ロンドンに到着すると、弟のピーターに金を無心されたが、彼を助けてあげることができなかった。しかしロムニーは自分の留守のあいだに画家としての名声が上がっていることがわかった。注文仕事がどんどんやって来て、経済的にも報われるようになった。

ロムニーは自分の地位にふさわしい高級な家に住む必要を感じた。偶々、ローヤル・アカデミー会員でパステル画家フランシス・コーツ (Francis Cotes, 1726-70) のキャヴェンディッシュ・スクエアの家が空き家になっていたので、一七七五年のクリスマスにそこに移った。

コーツはロイヤル・アカデミーの創設メンバーの一人でもあり、一七六〇年代には、ロンドンで最も人気の高い肖像画家となっていた。彼の肖像画は、色彩の輝かしさと、洗練された、魅力的なアクセサリーが描き込まれている点に、その特長がある。それらの要素は、もしコーツが長生きしていたならば、レノルズやゲインズバラの手ごわいライバルになったであろうと言われている。

コーツの亡くなったのは一七七〇年で、翌年二月に動産の売り立てが行われたが、家はその後長い間空き家であったので、かなりの修理が必要であった。ロムニーは煉瓦とモルタルが好きだったので、この家を改修できるのを喜んだ。彼は賃貸料、年百五十ポンド、三十年間の賃貸契約を結んだ。この家には天窗とドーム型天井の付いた二人用の部屋をしたらトリエがあったが、是非ともアトリエを建て部屋を増ししようとしたので、それ迄の彼の蓄えもなくなってしまうた。



この頃、ロムニーは愚かにも注文の多くを断ってしまった。彼の考えによれば、顧客を受け入れるのに相応しいアトリエがないからであった。こんなことをしたので、ロムニーはもうこれ以上仕事をしたくないのだという噂が広まってしまった。大衆の好みが変わってしまい、これまでロムニーに描いてもらおうと思っていた大衆からも見捨てられ、しばらくの間仕事がなくなってしまった。

この危機を救ってくれたのが、以前の友人で、自分の彫刻ギャラリーを自由に使わせてくれていたリッチモンド公爵であった。卿はロムニーの新居を訪れ、何点かの注文をしてくれ、さらには多くの友人を連れて来てくれた。卿はロムニーを自分と自分の知己だけの画家にすることを喜んだ。これによって流れは変わり、ロムニーにどんな仕事もやって来るようになった。

いまやロムニーはレノルズの強力なライバルとなった。レノルズはロムニーの名前を忘れたふりをして彼を軽蔑して「キャヴェンディッシュの野郎」と呼んだ。ロムニーは自分の画風がレノルズ一派の画家たちの中傷と軽蔑に対してどんなに違うか見せる機会をねらっていた。各界の名士は続々とロムニーのモデルとなって肖像を描かせた。それらの名前をあげたら当時の名士録ができるであろう。「町が二つに分かれている—レノルズ派とロムニー派である」と大法官サーロウ卿 (Edward Thurlow, 1731-1806) は述べ「ちなみに私はロムニー派だ」と続けている。

ロイヤル・アカデミーは一七六八年に創設されたばかりであった。会員たちは主な芸術家を入会させ、会員でない者は注目に値しないことを内外に示したいと思っていた。その時代の流行画家ロムニーを入会させて、展示場に彼の絵を飾ろうと努力したが駄目であった。ロムニーを誘ったのは創設メンバーでもあった細密画家ジェレミア・メイヤー (Jeremiah Meyer, 1735-89) であったが、さらにモーザー (George Michael Moser,

1704-83)、ハンフリー、アンジェリカ・カウフマン (Angelica Kauffman, 1740-1807) からも絵を展示してほしい言われた。しかし無駄であった。

ロムニーはロイヤル・アカデミーの展覧会には一枚も出品しなかった。彼はその申し出を完全に無視し、自分の面前でその話題が出るのを許さなかったし、自分は認められるに値しないと考え、レノルズやゲインズバラよりも低い価格で注文を引き受け、社交界の美しい婦人たちを描き続けた。この決心は彼の謙虚さによると言う人もいた。ロムニーは謙虚で、内気で、恥ずかしがりの人間であって、名声の絶頂期にあつてさえ彼は院長が喜ぶような輝かしい社会には姿を見せなかった。彼は妻を故郷に残してはいたが、家庭と息子を愛し、もの静かな人であった。アカデミーの栄光の中に加わらないという彼の意志は固かった。辛辣で自分の名声を妬んでいる人々に対して自分は一人がいいのだ、自分の作品を有名にしたり、評判を高めるのに何もアカデミーの力を借りることはないということを知らせるためであった。

このためには宮廷や王様の指示に従い、自分では選べない、ある選ばれた人たちのグループの庇護が必要であったが、結局ロムニーは実際には何も困らなかつた。彼はいつも自尊心が強く、でしゃばらない男であつて、どんな社会にも押し入ることもなく、友達に注文を頼むこともなかつた。お追従を言うこともなく、自分を助けてくれ、自分の要求する助力をしてくれる人に対してもお世辞の一つも言わなかつた。こういう風に彼は自分を世間の注目させるために策略を用い、庇護を得るためなら卑しいこともするといった彼の周囲によくいる人たちとはまったく正反対であった。

(5)

一七七六年、ロムニーはメイヤーを通じてウィリアム・ヘイリ (William Hayley, 1745-1820) と知り合った。ヘイリは今ではフェルバム時代のブレイクのパトロンとして悪名高い人物であるが、当代切つての有名な彼の『気質の勝利』は版を重ね、当時のベストセラーであった。トマス・ウォートン (Thomas Warton, 1728-1790) の後の桂冠詩人に擬されたこともあった。ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) は「あの男は詩は駄目だが、他の点ではすべてすばらしい」とヘイリを評しているように、周囲の人々から好感を持たれ、優雅な生活を送っていた。

フェルバムのブレイクは、兄ジェイムズに宛てた手紙で「彼(＝ヘイリ)は可哀想なロムニーをそうしたように、私(＝ブレイク)を肖像画家に変えようと考えているのです。しかしこんなことは彼であろうと地獄の鬼たちが皆んな集まっても絶対にできないでしょう」(一八〇三年一月三十日)とヘイリを非難している。マールチャード・ビショップ『ブレイクのヘイリ』(一九五二)によると、ヘイリがロムニーに勧めたのは肖像画ではなく、むしろヘイリ自ら「歴史画」と呼んでいたものであった。ヘイリはブレイクの非難そのまま、多くの肖像画をブレイクに描かせた。しかしロムニーがヘイリに会った時、ロムニーはすでに肖像画家であったし、ブレイクは自ら歴史画と呼びかつ重視していた分野のものを描いていた。つまりヘイリは両者共に一方に偏しないようにと勧めていたのであった。

ロムニーとヘイリの二人の交際は二十年以上も続いた。ロムニーは毎年秋になると、アーサムのヘイリを訪

れ、そこで数週間を過ごした。ロムニーが詩人ウィリアム・クーバー (William Cowper, 1731-1800) の友人アンウィン夫人、彫刻家ジョン・フラクススマン (John Flaxman, 1755-1826)、シヤールロット・スミス (Charlotte Smith, 1749-1806) などの友人を得たのもアーサムにおいてであった。クーバーはロムニーを称える次のようなソネットを残している。

Romney! expert infallibly to trace

On chart or canvas, not the form alone

And semblance, but however faintly shown,

The mind's impression too on every face,

With strokes that ought never to erase.

Thou hast so pencil'd mine that though I own

The subject worthless, I have never known

The artist shining with superior grace.

But this I mark, that symptoms none of woe

In thy incomparable work appear:

Well, I am satisfied it should be so,

Since on maturer thought the cause is clear;

For in my looks what sorrow could'st thou see,

While I was Hayley's guest, and sat to thee?

ロムニー！ 図やカンヴァスの上に

形と外見だけではなく、かすかに見えるものでも

あらゆる顔への心の印象までもを

決して消してはいけない筆で

完璧に描く名人。

汝は私を描いた。私は主題が

価値がないと認めても、私は知らなかった、

画家がとても喜んで輝いているのを。

しかしこれは認める、汝の比類なき作品には

苦悩のどんな徴候も現れていないのを。

まあ、そうあるべきことに私は満足している、

成熟した思想には、原因は明白であるから。

なぜなら私の様子にどんな悲しみをあなたは見る事ができたのか、

私がヘイリの客人で、あなたに肖像を描いてもらっていたときに。

ロムニーは一七七九年には久し振りにケンダルの妻を訪れ、故郷の景色を見て元気を回復したようである。しかしすぐにロンドンに戻って仕事に取りかかっている。

クーパーの死後出版されたヘイリの『クーパー伝』(一八〇三)にはロムニーが描き、ブレイクが彫版した肖像画が見返しに用いられている。

## (6)

一七八二年、ロムニーは四十八歳。友人でバトロンであったチャールズ・グレヴィル (Charles Grenville, 1749-1809) がエマ(のちのレディ・ハミルトン)をロムニーのアトリエに連れてきた。金に困っていたグレヴィルはロムニーにエマの肖像を描かせ、それを売って金を作ろうとしたのであった。それ以後、エマは一七八六年ロンドンを発つてナポリに向かうまでロムニーのアトリエに通い、ロムニーの求めるままに、古代神話の神々に扮するなどさまざまポーズでモデルをつとめた。エマをモデルとした残された作品には、ダフネ、ヘーベ、自然、お針子、またシエイクスピア『嵐』のミランダなどがあるが、なかでも『キルケ』以上にエマが美しく描かれている作品はない。この絵は彼女の娘らしい美しい姿が見る者に訴え、彼女がとても人を魅了する力を持っていることを知らせてくれる。ナポリに移った後も彼女はロムニーに手紙を送り、「私が自分の心を開いた最初の親しい友人」と彼のことを呼び、ナポリに来るように勧めている。

一七八五年にはロムニーの年収は、三千から四千ポンドに達したと言われている。全身で八十ギニー、半身で四十ギニー、頭部で二十ギニーの料金であった。この低料金でこれだけの年収を稼ぐため、一日に四、五人、一日十三時間も働いた。

ロイヤル・アカデミー院長のレノルズは、講演のなかで歴史画の重要性を説いてやまなかった。歴史画とは

ギリシア・ローマ神話に取材した絵である。

レノルズがロイヤル・アカデミーで行なった一連の院長講演（一七六九―一七九〇）は、教育という目的によって限定されていたとはいえ、終局的方向と結論においては総合的なものであった。それらが行なわれた期間の長さ、ジョンソンの影響の増大、そしてレノルズ自身の包容力の大きさがそれぞれ原因の一部となつて、他では個別的に主張されている批評理念の多数が、これらの講演のなかに姿を見せている。総合的に見るならばレノルズの『講演集』は十八世紀の美学の諸原理を一つに集めた、英語ではおそらく最も代表的な文献であろう。（W・J・ペイト、小黒和子訳『古典主義からロマン主義へ』八十六頁）

ロムニーも多くの肖像画家と同様に、肖像画の限界を越え、歴史画の第一人者になりたいという野心を持っていた。一七八七年、彼はヘイリへの手紙で「この忌々しい肖像画という家業よ。これは手足を縛る鎖だ。ぼくは決心した。質素にやつて金がたまつたらすぐに、こんな絵はやめたいよ。あの想像力という喜びに満ちた歴史画という領域に心血を注ぐつもりだ」と不満をもらしている。

一七八七年十一月のある日、ロンドンのポイデル家で催された晩餐会に、ベンジャミン・ウェスト、ロムニー、ポール・サンドビーといった当代一流の画家が集まつたときに、『シェイクスピア・ギャラリー』の話が持ち上がったと言われている。イタリア、フランスと比べてときに、自国の絵画的伝統の貧弱さを自覚していた彼らは、シェイクスピアの諸作品を絵画化することで、当時のヨーロッパ絵画の主流であつた歴史画をイギリスに興す必要を感じていた。

(7)

一七九〇年ロムニーは再度パリに出かける。今回はヘイリと彼が肖像画を描いたトマス・カワーディン師が同行した。彼らは歓迎された。当時フランス公使はガワー卿、後の第2代スタフォード侯爵にして初代サザランド公爵であった。公使の紹介状を持って、彼らは多くのギャラリーを訪れた。

ロンドンに帰ると、また仕事に忙殺された。彼は以前にもまして時代の寵児であり、金のある者はだれでもロムニーに肖像画を描いてもらいたいと思った。一七九一年にはエマが結婚し、レディ・ハミルトンとなり、一七九二年には宿敵レノルズが死去した。

仕事の緊張が彼の身体にこたえるようになってきた。彼はもう六十歳であった。しばらく町を離れて田舎で骨休みをするという口実で、ハムステッドにある家を手に入れた。またアーサムのヘイリーのもとにこれまで以上に滞在した。彼に肖像画を描いてもらいたいという顧客の何人かにはアーサムに来てもらい、都会の喧騒の中でよりも静かな環境の中でモデルの魅力を十分引き出すことができた。

アーサム滞在中には、しばしばペトワースに馬で出かけ、エグレメント卿の肖像画を描いた。このようにして都会では得られない田舎の空気を楽しんだ。

一七九六年ロムニーはキャヴェンディッシュ・スクエアを引き払ってハムステッドのホリー・ブッシュ・ヒルに家を買うことにした。しかしこの家の設備が満足すべきものではなかったため、家を改修することになった。家の裏手にヘイリが言うところによれば「風変わりな建築物」、カニンガム (Allan Cunningham, 1784-1842)



が呼ぶところによれば「奇妙な新しいアトリエと住居」を建て増した。二千七百三十三ポンドもかかった奇妙で異様な構造で、庭には乗馬のための木造のアーケイドや広いギャラリーがあつたが、家庭生活に十分な施設は何もなかつた。一七九八年にはキャベンディッシュ・スクエアの家が売れた。

この「異様な」家は彼が引越したときには、完全には出来上がつていなかった。壁は乾いていなかったし、天井からは水もれした。しかし彼は自分の絵と、自分が収集した絵を携えてこの変な家に住むことにしたのであつた。

ロムニーは以前にもましてヘイリの影響下にあつた。その影響力は極端に有害で、ロムニーを助け、世話するために彼の家に他人が連れてこられた。ヘイリはロムニーにかなり借金をして、評判高い自分は画家の仕事を覗くべきでないが、自分の影響力は絶大であるべきだと切望していた。ヘイリは人はいいが、おせっかいな人であつたようで、ブレイクも彼のおせっかいにはうんざりしたようだ。

一七九八年、ロムニーはこの状態を断ち切つて息子に伴われて、イングランド北部を旅行した。妻のいるケンドルには行かなかつたようだが、湖水地方での休暇は楽しかつた。しかし老いた画家はもう精神力を取り戻すことができなかつた。ロンドンに戻ると彼の健康は衰えた。

翌年アーサムのヘイリの所に出かけたが、これが最後となつた。ヘイリは金銭的には駄目な男で、その贅沢な生活が破綻に瀕してしまい、ついに彼はアーサムの屋敷を売ることになつた。ヘイリはフェルバムに移りそこに家を建て、息子と住んだ。ブレイクがヘイリに呼ばれて出かけたのはここフェルバムであつた。

一七九九年、フラクスマン夫妻に熱心に勧められ、また息子にも懇願されて、長いこと会つていなかったケンドルの妻のもとに出かけることになつた。妻は夫を喜んで迎え、死ぬまで夫の世話をした。弟のジェイムス

大佐がインドから戻ってきたが、ロムニーは弟と認識できないほど弱っていた。故郷に戻ってから三年後の一八〇二年十一月十五日、妻に抱かれて六十八歳で亡くなった。ダールトン教会の彼の墓碑銘には「天才と才能が敬われる限り、彼の名声は生き長らえるであろう」(So long as Genius and Talent shall be respected his fame will live.)と刻まれている。

ヘイリは『ロムニー伝』を書くための資料集めの小間使いとしてブレイクを雇った。ブレイクはロムニーの作品が置かれている様々な場所のリストを作成することに多忙な日々を過ごした。結局、伝記はブレイクがロンドンに帰ってから六年後の一八〇九年チチエスターで出版されたが、ブレイク彫版のロムニー像は収録されなかった。

ロムニーの子どものうち唯一成人したジョン (John Romney, 1758-1832) は牧師となった。彼は『ロムニー伝』(一八三〇)を書き、そのなかでヘイリを攻撃している。

(8)

ロムニーは色彩感覚が欠けている、レノルズやゲインズバラに比べて技術的にも劣っている、またゲインズバラの絵を魅力的にしている背景としての風景を構想する能力がないと言われる。色彩を得意とする画家ゲインズバラ、彼の作品には絵筆から流れ出て、その作品を洗練したものにする诗情がある。ロムニーは人物の精妙な表現力、優雅さ、新鮮さという点ではロムニーはゲインズバラに劣るなどと言われている。

レノルズやゲインズバラに劣るといわれる画家ロムニーの特色は何か。デッサンに秀でた画家。正確に真実

をこめて描く能力、この点ではレノルズやゲインズバラに勝る。「飾りのないこと」(simplicity)、これがロムニーの作品のキーワードである。

ロムニーの作品はレノルズほど多彩ではなく、むしろ単調で、リアル (real) よりもアパレント (apparent)、真偽はともかく真実らしいと言われる。ロムニーの女性はみんな同じだと言う人もあるが、よく見ると違う。姿勢、目つき、衣装などの策略にかなり依存しているのが特長である。色彩も単調で、ロムニーは褐色とバラ色が好みであった。

彼は鋭い美の感覚を持っていた。暖かく豊かで明るい色を愛し、歴史画においては力強い想像力を發揮している。しかし不注意にも自分の力を浪費し、注文に追われて十分に力を注いでいないものも多い。

確かにロムニーの絵は魅力がある。それはなぜか。エマ (レディ・ハミルトン) をモデルにしたものには、『キルケ』『カリプソ』『カサンドラ』『聖セシリア』『マグダリアのマリア』『ジャンヌ・ダルク』『パッカスの信女』『冥想』などがあるが、なかでも『キルケ』『カサンドラ』には、崇高さ、威厳があり、画家の才能が最大限發揮されている。また彼には子どもを愛し、子どもを元気のいい子どもらしい気質のなかで描く能力があった。きびきびした子どもの顔はとても魅力的で、見る者を喜ばす。子どもの姿には優雅さと甘美さがあり、これは注目すべきであろう。

ロムニーは優雅さの感覚があった。彼の考えは当時支配的であった流行や古典的衣装という限界があった。モデルたちの希望は、普通の衣装と姿勢ではなく、女神や神話的人物のようにギリシアあるいはローマの衣服を着て、描いてもらうことであった。その容貌に答えるのが肖像画家であった。しかし例外として、『お針子』のように質素なガウンを着て、自然な姿勢をとったものもある。

ロムニーはレディ・ハミルトンを古代神話の神々に扮する姿で様々なポーズを取らせて描いて評判になった。彼女はお追従を喜び、美しいことを褒められるのを好んだから、画家は美しく描いてくれるのだから、モデルになることを厭わなかった。ロムニーとハミルトン令夫人という組み合わせがギリシア風の衣装を流行させ、それまでの流行であった胸の長い衣服を廃れさせることになった。ロムニーに描いてもらいたい女性は、レディ・ハミルトンのように描いてもらいたいのであった。

ロムニーの肖像画がレノルズを越えたものがあるとすれば、肖像画で用いられている色彩が時の試練に耐えて変色しないことであつた。レノルズはピチューメン（アスファルトから作られた顔料・光沢剤）などの適当な画材を実験的に用いたので、生前にさえ画面が変色した作品が多く、これがレノルズの欠点と言われる。彼は結果に満足せず、より良い結果を求めて新しい媒介を用いて、新鮮な色彩、下描きの実験をしていた。

ロムニーは人物の肉体の色にレーキ（深紅色顔料）やカルミン（深紅色ノ絵ノ具。コチニールという虫を乾燥させて作る）のような短命な色を使うレノルズのやり方には魅力を感じなかった。背景にピチューメンやアスファルトを使つたり、展色剤にワックスを使用する気にもなれなかった。このような誘惑を避けて彼はレノルズには欠けている色彩の寿命を確立することができた。

レノルズは画風、主題、そして技法さえ大胆に変えてみせた。彼の画風の多芸多才ぶりは大いに称賛された。レノルズとは違って、ロムニーは絶えざる実験を避けた。彼の精神ははずっと単純素朴であつた。彼は平明で単純な手段で望んだ結果が獲得できればそれで満足した。色彩設計と、十分な技法が見つかれば、それで満足であつた。ロムニーはそんな男であつた。

(英米文学科 教授)

肖像画家 ジョージ・ロムニー (松島)



George Romney (1734 -1802)



Lady Hamilton (c.1761-1815) as 'Ariadue', by  
George Romney